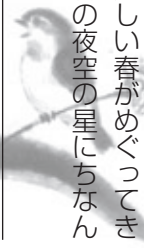


この冬、あだたら高原は豪雪にすっぽり埋もれてしまいましたが、その雪の下で、春は待っていてくれました。森の樹々の芽はふくらみ、雪どけ水の音が響き、鳥たちは歌の練習をはじめます。また岳の美しい春がめぐってきました。今回は春の夜空の星にちなんでお話をします。



昭和の始め頃―岳温泉のまちにも、花の都・東京の花びらが風に乗ってちらほら流れてくる時代のお話です。

通りの両側に宿が並んだ温泉町は、安達太良山脈につながる森の入り口まで伸びておりましたが、その森のすぐそばに「山吹や」という宿がありました。そこで働くサキは、山を越えた小さな村から、小学校を出るとすぐに奉公に来た女の子で、十三歳。おしゃれがちよつと気になる年頃になっておりました。

山吹やの女将は、温泉まち一番のおしゃれで通っており、他の宿の女将よりどこかあか抜けている、と評判でした。女将のたのしみは、東京で発行される婦人雑誌を年に何回か町の本屋から取りよせて、最新流行のおしゃれを「研究」することでした。それを読

み終えると、「みんなで見てごらん」と宿の女中たちに貸してくれるので、その時がくると女中たちは争うように本を見ては、みんなだめ息をついて見入っております。サキも同じで、むずかしい字は読めなくとも、見たこともない美しい女の人たちの、見たこともない服、波打った髪型や髪飾り、首飾り…。きものだって目のさめるようなきれいな模様、ふんわり結び上げた髪型…。サキもただため息をつくばかりです。

ある時、その雑誌に「美容院」の記事がのっていました。流行の髪形をしたきれいな女の人たちがほほ笑んでいる

銀河美容院と熊の星座のおはなし



分のボサボサの髪を束ねただけの姿を思っ、「んだなあ、おらもその、びよういん、さ、行ってみでえ」というと、「おめはまくだ、早い早い！」と女中たちは笑いました。でも、「びよういんに行ってみたい」という気持ち

は、サキの心の底ですうつと小さな火になって燃えておりました。秋も深まったある日、サキは焚き木を集めに森に出かけました。ずんずん森の奥に進んで行くと、藪の中で、ごくそそ大きな音がします。息を殺してのぞいてみると、熊の親子がしきりに餌を探していました。冬ごもりが近いので、その前にいっぱい食べて、力を

は、苦しい秋でした。熊の親子はあちこちをぐるぐる回って餌を探していますが、さっぱり見つからない様子です。「じよもいるのにかわいそつだなあ」サキは藪の中にうずくまりながら、ため息をつきました。

宿に戻ったサキは、ふと、思いつきました。宿では、お客さんの膳の残り物は、裏庭に面した厨房の出口の大きな樽に貯めておいて、それを農家の人が肥やしにともらいに來ます。「うん、これを熊にやるべ、これなら熊も助かるべ！」―それからサキの秘密の日課が始まりました。夜明け前、宿がまだ寝しずまっている時に、残飯を抱えて森に行き、熊の親子に出会った藪の近くの、大きなぶなの木の根元に餌を置いてくるのです。次の朝、サキがそこに着くと、残飯はきれいになくなっていました。「ちつとは腹の足しになりましたがなあ」サキは少しほっとして、次の日もまた次の日も、ぶなの木の根元に残飯を運んでやりました。

そのうち、熊の親子は、ぶなの木の下でサキを待っているようになりました。サキはうれしくて、いっそう張り切って残飯を運びました。親熊は、熊同士のけんかかなにかでケガをしたのか、右の耳の端がギザギザなので「ギザ」、子熊は白いのご輪の端がふんわり丸くて、こぶしの花のつぼみみたいなので「ツボミ」と名前をつけてやりました。

何日残飯運びが続いたでしょう。い

蓄えておかなければならないのです。でもその年の夏は、冷たい雨続きだったせいで、山は、栗もどんぐりも山ぶどうもきのこも不作で、そういうものを食べ物にして生きる動物たちに

つものように、ギザとツボミが待っていてくれると、大事な友達ができたようで、夜明けの森に通うのがサキのひそかな楽しみになりました。

ある朝、いつものようにサキが残飯の樽をあさっていると、後ろから肩をたたかれました。サキが飛び上がってびっくりすると、宿の番頭が立っていました。「サキ、おめえだったんだな。なんだがこの頃、残飯が減ってるっつうから、ふしぎだと思つて、今朝は見張つてんだ。これはな、百姓さまの大事な肥やしになるもんだ。おめえ、なんで残飯盗んでんだ？」—昔から山吹やに奉公してもう七十を超えている番頭はおだやかな人柄で、女中や小さな奉公人からも慕われておりましたが、この時ばかりは、サキが見たこともない厳しい顔で立っています。

「番頭さん、おら、盗んだんでねえ！」サキはそのわけを話しました。

黙つて聞いていた番頭は、静かにいました。「なあ、サキ。今年はず、山のもの食つて生きる熊も、キツネもタヌキもリスも、鳥も、みんな餌がなくてつらいつらい年だ。んでもな、それは神様からもらった。運。つうもんだ。けどものも人も、みんな神様からもらった。運。で生きている。凶作で食うものがなくて死ぬのも、豊作で腹いっぱい食つて生きるのも、みんな運。だ。サキがこうやって、熊に餌やつてたら、次から熊は自分で餌取つて生きる気がなくなつちまう。山でく

らすけだものによげいな節介、けつしてするもんでねえ。わがったな」

明け方にいそいそと森に行くサキの姿は、その口からぶつくり消えました。でもサキは、つらくてつらくてたまりません。食事のときは、腹を減らして自分を待っているにちがいないギザとツボミを思つて、ぼろぼろ涙をこぼして、ほかの者を不思議がらせました。番頭だけが黙つてサキのそんな姿を見守っていました。



それから半月ほどして、ちらちら初雪が降つた夜のこと——夜更けに勝手口の外でこそごそ音がするので、女中がおそるおそるのぞいてみると、大きな熊と子熊が残飯の桶をひっくり返して食べている、と大騒ぎになりました。「ああ、ギザとツボミだ！」サキが飛んで行ってみると、ひっくり返つた樽のまわりに残飯が散らばっているばかりで、もう親子の姿はありませんでした。山吹や森のすぐ隣にあるの

に、これまでいっぺんも裏庭まで熊が来たことがない、といつてみんなが恐ろしがりました。

そうするうちに、事件。が起きました。夜遅く、裏庭の方から「ぎゃー」と大きな悲鳴が聞こえて、宿中の者が駆けつけました。そこには浴衣姿のお客さんが腰を抜かしてすわり込んでいました。なかなか寝付けないので、一風呂浴びて湯上がり裏庭をぶらぶらしていたら、熊の親子と鉢合わせしてしまつたということです。サキは胸がつぶれる思いでただおろおろするばかりでした。

次の日、宿の主人はふもとの村から鉄砲打ちをたのんで、熊を打つことにきめました。山吹やに熊が出るという話が広がつたら、商売あがつたりだということです。こんなことになつたのは自分のせいだ、とサキは苦しみました。でもどうすることもできません。

とつとつ、鉄砲打ちがやってきました。その晩、裏庭の植え込みの中に隠れて熊がくるのを待ち伏せて撃つというのです。「ギザ、ツボミ、来るな！来てはなんね！」と、サキは心の中で叫んでいましたが、時間は刻々とたつて、親子が現れる夜中になりました。

宿の者がみんな息を殺して厨房に集まっています、まもなくズドン！という銃声と、女の子の叫び声が同時に響きました。みんなが外に飛び出してみると、大きな熊が腹から血を流して倒れています。かたわらに鉄砲打ちが

ガタガタふるえて立っていました。「なんだか、娘の声、聞こえたようだ」とみんなが不思議がると、鉄砲打ちはいいました。熊を狙つて引き金を引く寸前に、「うっな——ッ！」と叫びながら、女の子が植え込みから飛び出してきた、熊に抱きつくのと、撃つのが同時だった。と。みんなは、ことの恐ろしさに真つ青になって黙りこみました。

男たちがうつぶせになって死んでいる熊をよけてみると、その腹の下にサキが倒れていました。「ああっ！」みんなの悲鳴があがりました。「サキが死んだ！」—なんでサキがごさいるんだ！—その場に泣きくずれる者もありました。気を取り直した番頭が抱き起こすと、サキは小さく息をしました。「だじょぶだ、気絶しただけだ！」—みんな胸をなで下ろしましたが、サキがなぜそこにいるのか、さっぱりわかりませんでした。番頭だけが、「サキ、熊はかわいそうだったなあ」とつぶやいて、そつとサキのほつぺたの泥をふいてやっていました。

熊の事件もひとまず落ち着いて宿もまた元通りおだやかになりましたが、サキだけは、しごとの合間に人にかくれて泣いてくりました。あの晩、母熊が撃たれて人が大騒ぎしている時に、走つて森の方に逃げていく子熊を見たという話だけが、サキのかすかな救いでした。親をなくしたツボミはどうしているんだらう、と思うと食事ものを通らない日が続きました。—そ

れから半月ばかりして、サキはそっと宿を抜け出して森に入り、いつものぶなの木のところに行ってみました。

すると、その根元に、ツボミが冷たくなって横たわっていました。食べ物もなく、飢え死にしたのでしょうか。「おらのごど、待ってだんななあ、ごめん、ごめんな…」サキはすっかりやせ細ってあばら骨が浮き出ているツボミを抱きしめました。

目がつぶれるほど泣きながら、サキは太い棒切れで穴を掘って、ツボミをぶなの木のそばに埋めてやりました。ギザの死骸は鉄砲打ちに持っていかれてしまいました、サキの心の中にある姿をツボミといっしょにほうむってやりました。「飾る花がなんにもなくて、かんべんしろな」とつぶやいて、サキが手を合わせると、折りしも空から白い花びらのような雪が墓を包むかのように降ってきました。

岳の冬がやってきました。山も野原も温泉まちも真っ白な雪におおわれ、働き者のサキの手はアカギシで真っ赤になりました。熊の事件があつてから、サキはすっかりぶさざこんでしまつて、東京のすてきな雑誌を見ても、ちっとも心が浮きたりません。そんなサキの小さな慰めは、かまどの火をつける枯れ枝を拾いに森に行つて、その時に、ぶなの木のそばのギザとツボミの墓にお参りするこゝろでした。

そのうちに、お正月が来ました。奉

公人が、お盆の次に実家に帰れるうれしい時です。サキも、山を越えて両親と弟たちが待つ家に帰ります。

マントに雪靴でサキは深い雪をかき分けながら、森の道を進みました。いつものぶなの木のところにさしかかつて、お参りしていいこゝろ、雪に埋もれたツボミとギザの墓を探していると、見慣れない立て札があります。見ると、赤い、しゃれた文字で「銀河美容院」と描いてあり、その下の小さな矢印が森の奥を指していました。「あれ？女将さんの本にあつた『美容院』だ…」サキはおそるおそる、その矢印の方に進んでみました。森はだんだん深くなつて心配でしたが、あちこちの木の幹に赤い矢印が描いてあるので、サキは勇気を出して歩いていったのです。



しばらく行くと…なんとしたことでしよう、青い色の壁にきらきら光る窓ガラスをはめた、小さな建物が木立の

間に見えてきました。サキがドキドキしながら近づいてみると、ドアに「銀河美容院」という木の看板がかけてあります。サキが来るのを待っていたかのように、鈴を付けたドアがチリリン、とひとりで開きました。壁の真ん中には大きな鏡と、その前に椅子が一つ…。サキがあたりを見回していると、部屋の奥から白いエプロンを付けたキツネ…そして、小さな熊と大きな熊が現れました。それを一目見たとたん、サキはわっ、と泣きながら熊たち

にかけよりました。大きな熊のギザギザの右耳、小さな熊の、こぶしのつぼみのような白いのど輪…まぎれもない、ギザとツボミの親子ではありませぬか。—「ギザ！ツボミ…会いでがった！」親子の首を抱きしめて泣きじゃくるサキの頬を、熊たちはやさしくなめていました。キツネはその様子を見守りながら、「さあ、始めますよ」というようにサキを椅子に座らせました。そして、たっぷりお湯をいれた大きな白い器をサキの後ろにもってきて、いすの背をひよいと倒し、びっくりしているサキの髪を、ていねいに洗いました。花の香りのする泡がいっぱい立って、うっとりしているうちに、サキのボサボサの茶色がかった髪は、つやつやの漆のような黒髪になりました。それからキツネは、ピカピカの小さなはさみで、サキの髪を切りました。前髪をきれいにそろえて、わきも後ろもとのえると、金色の液体を髪に

塗って、銀色の小さな筒でぐるぐる巻きました。それから、大きな釜のような帽子を運んできて、サキの頭にかぶせました。帽子の中はぼかぼかあたたかくて、サキがうとうとしていると、キツネは、サキの手に何か軟膏を塗り、爪をていねいに磨いて桜色の液体を塗りました。

サキが居眠りからさめると—鏡の中に、黒いきれいな髪がゆったり波打った、見たこともない自分があります。「うわあ、これが『パーマネント』…つつうのが！」サキは小さく叫びました。それからキツネは、サキの化粧にとりかかりました。化粧箱の中には、おしろい花の小さな黒い実と、カヤの実がいっぱい詰まっています。キツネはまず、黒い実を手早く石ですりつぶしてふるって、白い粉にすると、タンポポの綿毛のパフでパタパタとサキの顔と襟足にはたきました。それからカヤの実をつぶして赤い果肉を取り出すと、自分のしっぽで作った筆に付けて、サキのくちびるに塗りました。それから波打った髪をぐるりと巻き上げて、後ろにまとめると、星を小さな花束にしたような髪飾りを付けてくれました。鏡の中には、お姫様のように美しいサキがいました。「これが美容院…うとうとなんだ…」サキは感激して、鏡の中の自分をただうっとりながめるばかりです。その姿を、ギザとツボミがうれしそうに見ておりました。どのぐらい時がたったのでしょうか。

森に差し込む陽が傾きはじめています。「んじゃ帰るよ。ギザもツボミもキツネさんもありがと。んでも、はあ会えねんだべが…」サキがいうと、キツネが前で鏡に何か書きました。あんまりへたくソで、サキは笑いそうになりましたが、「ハルノヨル、キタノソラ、マタアエル」と読めました。「春の夜にどうやって北の空で会えるんだべ…」サキは首をかしげながら「銀河美容院」を後にしました。

ギザとツボミは名残惜しそうに付いてきました。いつも会っていたが、木にさしかかると、ふうっと消えてしまいました。

サキはなんだかわけもわからないまま、でも、うきうきと家路を急ぎました。道々、「きれいになったおらのごと見て、父ちゃんも母ちゃんも、弟も、たまげで腰ぬがすべなあ」

サキの家はぼっかり明かりをつけて、久しぶりに帰ってくる娘を待っておりまして。「ただいまーっ！」サキが飛び込むと、家族がみんなにこりと迎えてくれました。でも、どれも腰を抜かさなばかりか、「正月だつづつのに、娘らしいかつづつでもぎねで帰ってきて、かわいそうだなあ」と、母親が涙ぐんでサキを抱きしめます。サキは、しいん、と考え込んで、納戸に駆け込んで、鏡をのぞいてみました。すると、さっきあんなにきれいだった自分ではなくて、いつものボ

サボサ髪のすすけた顔のサキが、びっくり顔で映っています。

「おら、山の中で夢見たんだべが…いや、キツネにだまさつちゃんだべが…。んでも、よがったなあ、ギザとツボミに会えなし、美容院にも行ったし…」と思いつながら、ふと自分の手を見ると、あんなにひどかったアカギシの傷口がきれいにふさがっているうえ、爪が美しい桜色に染まっています。「やつぱり、夢でながったんだべが…」

ぼんやりしながら、寝床に入るうとすると、きものふところのなにかカサカサいうものがあります。取り出してみると、朴の枯葉の包み。中には、銀色の星の花を束ねた小さな髪飾りが光っています。そして、枯葉になにかうつつら字が書いてあります。明かりにすかしてみると「ハルノヨル、キタノソラ、ウスレナイデ」と読めました。正月三日の休みも終わり、サキは胸の中に小さな秘密を抱いて温泉まちに戻りました。

やがて雪がとけて、春がきました。美しい緑の山々に白いこぶしが咲き、夜は満天の星を散りばめた空が岳を包みます。サキは、毎晩毎晩、キツネの伝言をたよりに空をあおぎ続けまし

た。宿の者はみんな、サキの頭がへんになったかと心配するほどでした。

その日は、朝からかっきりと空が澄んで、星空がとりわけ美しい晩でした。サキがいつものように星空をあおいでいると、北の空に、まるで呼吸をしているかのように輝く星の群れがあります。サキに「こただよ」と信号を送っているように、大きく小さく光って、それはほかのどの星よりも、ぬれたように鮮やかに輝きつづけています。「ああ、あれだ！」サキは見つけました。星の群の形をたどると、大きなギザと、その下に小さなツボミがいます。「おーい、見つけたよ、そこにいるんだな！」サキが空に向かって叫ぶと、ギザとツボミが応えるかのように、星座はいちだんと強い光を送ってきました。

それからというもの、サキは春になると夜空をあおいで、熊の親子と語り合うのがなよりの楽しみとなくさめになりました。

また時がたって、十九になったサキは、気立てのよさと働きぶりを見込まれて、山吹やの親戚筋の、岳温泉の宿に嫁入りしました。サキの婚礼の晩、北の空の星の群が、まるで地に下りてくるかのように近く見え、いつになく強い光を放って輝いて、嫁入り行列の人々をびっくりさせました。「ギザ、ツボミ、ありがと」そのわけをたったひとり知っている、花嫁姿のサキが、空にそっと手をふってつづやま

した。花嫁の髪には、星の形の花のかんざしが銀色に輝いておりました。

サキはそれから幸せにくらしました。春になると、宿のお客さんに北の夜空の「星見」をすすめては、「ほら、あそこに大きい熊と小さい熊がいますべ」とうれしそうに説明するので、サキの宿はいつしか「熊星や」とよばれるようになったということです。

あだたら高原自慢のおもてなしの一つは、澄み切った夜空いっぱい広がる星。春、北の空に現れる、ギザとツボミ、大熊座と小熊座をさがしてみてください。

それから、森のどこかに「銀河美容院」の看板が出ているかもしれせん。迷子にならないように気をつけて、訪ねてみてください。

岳温泉 野の花一輪香る宿

政府登録旅館



あだたらの宿

福島県二本松市岳温泉1-3
TEL.0243(24)2001 FAX.0243(24)2004

扇やペア宿泊券
をどうぞ

●大切な方、親しい方へのあったかいプレゼントに、扇やのペア宿泊券(お2人でご1泊3万円)はいかがでしょう。